

阿佐ヶ谷教会



# 信友会 会報

3月例会（3月13日開催）報告



使徒言行録の学び（第26回） 堀川 樹牧師  
—新約聖書 使徒言行録 第28章・まとめ—

「テオフィロさま」で始まる使徒言行録の聖書講解を始めたのが今から4年前。多くの先生方に登場していただき、全28章まで読み終わることができました。その最終回を受け持ってくれたのがこの4月から亀戸教会に移られた堀川樹牧師。信友会でもそうだったように新しい土地でも熱く語っていることと想像しています。桜の花が散ってもまだ寒い日が続きますが、季節はこれから新緑です。阿佐ヶ谷にあってもこれから始まる1年が実り多いときでありますようにと祈りつつ、共に歩んでいきたいと思ひます。

## 『聖霊行伝をたどる—使徒言行録の学び—第28章・まとめ』

堀川 樹 牧師

2012年4月から始まった「使徒言行録の学び」は、4年をかけて最後の28章になりました。初代教会の使徒たちの伝道は、聖霊に導かれなければ果たせないものでした。

第1章4節で使徒たちは復活のイエスから、エルサレムに留まり、神さまの約束である聖霊を受けて力を得、地の果てまで、わたしの証人になるよう告げられ、伝道は始まりました。そしてローマに辿り着き、一つの区切りを迎えるのです。ローマへの護送では、パウロは私たちの予測を越えて 囚人という不自然な身分で福音を宣べ伝えたのです。これこそ、聖霊の導きと言えるでしょう。

### マルタ島で

前回の27章では、パウロの乗った船は、暴風を受けて難破しますが、パウロの励ましにより 全員が無事にマルタ島に辿り着きます。マルタの人はギリシャ語を話さない人たちでした。言葉が通じない中でも好意的に迎え入れ、彼らは陸に上がったパウロたちの体を暖めるため、火を起こしてもてなします。そこで一つの事件が起こりました。火の熱によって蝮が出てきて、パウロに噛みついたのです。彼らはパウロが悪人故に蝮に噛みつかれたのだと理解しましたが、パウロが何の害も受けないのを見て、この人は神さまだと尊敬のまなざしで見ました。人は自分の都合に合わせて評価するものなのです。

そしてパウロは島の長官ププリウスから手厚いもてなしを受けます。彼の父が熱病であったので、パウロはイエスにならい、神に祈り、彼に手を置いて癒します。これを聞いて島のほかの病人たちもやってくるようになるのです。パウロは主の名によって病人を癒し、ここにも主が共に生きていることを示しました。囚われの身であっても神さまを力強く証しすることができたのです。

そして11節からは、いよいよローマへと出発します。この島で冬を越したディオスクロイというギリシャ神話にある双子の英雄の飾りを付けたアレクサンドリアの船に乗ります。そしてシチリア島のシラクサを経由してイタリアのレギオンへ。翌日南風を受けて2日でローマの貿易港のプテオリに入港し、兄弟たちに請われるまま



に7日間滞在します。(聖書卷末の地図9、パウロのローマへの旅参照)多くの困難を経て2年間を要してようやくローマへ着いたのですが、パウロのその思いは、ローマの信徒への手紙1章8節から15節に切々と語られています。

ローマからはパウロの到着を聞きつけ、信徒が途中のアピフォルムやトレス・タベルネまで迎えに来ました。アピフォルムまでは70キロ、トレス・タベルネまでは50キロの距離でした。会ったことのない信徒たちが遠くまで出迎えてくれたことはパウロを勇気づけたことでしょう。ローマに着いたパウロは、番兵1人を付けた家を借り、自分だけで住むことが許されました。自由で安全を保障された生活でした。このことも神さまのご計画の内にあっただけです。

### ローマでの福音伝道

17節から20節で、パウロは主だったユダヤ人を招いて、これまでの経緯を説明します。パウロに対する悪い知らせがローマのユダヤ人に報告されていると思っていたからです。

パウロは自ら、自分はユダヤ人の中のユダヤ人であり、決して敵対しているものでないことを告げます。

しかし21、22節で、ローマのユダヤ人たちは「私どもは、あなたのことについてユダヤから何の書面も受け取っておりませんし、ここに来た兄弟のだれ一人として、あなたについて何か悪いことをしたことを報告したことも、話したこともありませんでした。あなたの考えていることを、直接お聞きしたい。この分派については、至るところで反対があることを耳にしているからです。」と言います。

パウロの福音伝道は、まずユダヤ人に対して行われました。行く先々のシナゴグで話しますが、至るところで妨害が起こります。神がイスラエルの失われた羊のために行った伝道を頑なに拒否されたので、異邦人が招かれることとなりました。神の眼差しはまずユダヤ人に注がれたのです。ユダヤ人は旧約の時代から神と共に歩んだ民族、神の民です。神は頑ななユダヤ人のために、モーセを立てて無理やりエジプト王との交渉を行わせ、イザヤを通して心頑ななユダヤ人に警告させ、エレミヤを通してバビロンに降伏するよう告げるのです。神を宣べ伝えることは、効率や効果ではなく、神さまに対しての忠実さが求められます。神さまにひれ伏し、従う時に主の栄光が現れるのです。

23節から、ユダヤ人たちは日を決めてパウロのもとに大勢集まり、パウロは朝から晩まで神の国について力強く語ったことが記されています。モーセの律法や預言者の書を引用して主イエスの福音を宣べ伝えたのです。これをある者は受け入れたが、ある者たちは信じようとしなかったのです。そして両者の意見は一致せず、彼らはパウロのもとを立ち去ろうとします。その時、パウロは、イザヤ書6章の9～10節にあるイスラエルの滅びの預言を引用して語ります。「この民のところへ行って言え、あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、立ち帰らない。私は彼らをいやさない」。ここには、神



さまがイスラエルを神の民として選び、愛を注いだけれども、神の言葉に背き続けるユダヤ人の姿と、それに対する神さまの厳しい裁きが預言されています。パウロは、イエス・キリストの十字架と復活の福音を先ずユダヤ人に向けて語られたが、ユダヤ人は頑なにこれを受け入れなかったため、異邦人に向かい福音が前進したのです。神さまは拒否するユダヤ人をも用いて神の救いを広げていったのです。福音は異邦人に向けられ、そして全世界へ、そして私たちにまで届きました。ここにこそ計り知れない神のご計画があるのです。

そして最後にはパウロが自費で家を借りて、丸2年イエス・キリストについて語り続けたと記され、使徒言行録は終わります。パウロのこの2年間は、何の妨げもなく語ることができた時でした。ローマ帝国の拘束の中でありながら、むしろこの拘束をも用いて自由に語ることができたのです。この状態では誰も手を出すことができなかったのです。そして、この時期に、エフェソの信徒への手紙、フィリピの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙とフィレモンへの手紙の4書簡を書き送ったとされています。

### 使徒言行録のまとめ

信友会は、2012年4月例会の大村栄牧師による第1章の講解から使徒言行録を学んで来ました。1章3節以下で、復活のイエスは弟子たちに、エルサレムに留まり聖霊を受けて地の果てまでイエスの証人になるよう勧めて、天に上ります。2章では聖霊降臨（ペンテコステ）があり、弟子たち一同は、「イエスがわたしたちの罪のために十字架にかかり3日目に甦った」という神の救いの福音を聖霊を受けて語り始めます。3～6章ではペトロを通して初代教会が発展していった様子が記され、7～8章では、キリスト者の群れが大きくなり、迫害が起こったことが記されています。ここではディアスポラのユダヤ人の信徒たちが迫害の対象であり、ステファノの殉教、多くのギリシャ語を話す弟子たちが追放されサマリアや周辺社会に福音が拡散して行きます。そして、9章で迫害に加担していたパウロ（当時はサウロ）に、ダマスコ途上で復活の主イエスの顕現があり、回心へと導かれます。10章では、ペトロが神の幻を受けて、カイサリアでローマ軍の百人隊長コルネリウスに福音を告げ、ここで初めて異邦人が聖霊を受けることになったのです。

13章からはパウロを中心に記されます。第1回の伝道旅行が始まり、15章でのエルサレム会義で、「ペトロがユダヤ人へ、パウロが異邦人への福音伝道を行う」とこととなったのです。ここからパウロの3回の伝道旅行の様子が書かれ、神の啓示を受けながらアジアからギリシャへの福音伝道を展開します。20章から、伝道旅行を終えてエルサレムに上ったパウロは、民衆に捕らえられ殺されそうになります。エルサレムの最高法院、またローマ総督へ、民衆へも弁明を行いますが、むしろ、これを主イエスの福音を語る絶好の機会として救い主イエスを大胆に証しをします。そして、ローマ皇帝に上訴してローマに護送され、本日の28章でローマでの福音伝道で使徒言行録は終わります。使徒言行録は、使徒たちが聖霊に満たされ、力を得て福音伝道へと遣わされていたことが記されている、まさに聖霊行伝なのです。その聖霊は今も私たちに生きて働いておられる聖霊に他なりません。

(文責：玉澤武之)

